

## [成果情報名] 水稲中生有望系統「南海 166 号」の特性

[要約] 水稲系統「南海 166 号」は出穂期、成熟期とも「ヒノヒカリ」よりやや早い“中生の早”である。稈長は短く、耐倒伏性は強い。やや小粒だが玄米重は同等である。高温登熟性に優れ、玄米品質も良く、食味も「ヒノヒカリ」並の良食味である。

[キーワード] イネ、南海 166 号、高温登熟性

[担当] 農林技術開発センター・農産園芸研究部門・作物研究室

[連絡先] (代表)0957-26-3330、(直通)0957-26-4350

[区分] 農産

[分類] 指導

---

## [背景・ねらい]

本県では、平成 16 年度に水稲品種「にこまる」を導入し、県央の平坦部では、作付面積が「ヒノヒカリ」を大きく上回るようになってきており、1 品種への作付け集中が懸念されている。また、平坦部では「ヒノヒカリ」の高温障害を回避するため、遅植えも実施されているが、近年の温暖化により、遅植えしても十分な効果が認められない。さらに、作付けの主体である「にこまる」も同様に遅植えされるため、成熟期が遅く、登熟後半の気温低下による品質低下が問題となっている。「にこまる」の安定生産のためには、移植期を「にこまる」にあわせ、現在実施されている遅植えよりやや早くする必要がある。

そこで、このような地域を対象に、「ヒノヒカリ」に替わり、「にこまる」との作期分散が可能で、高温登熟性にも優れた品種の選定が必要である。

## [成果の内容・特徴]

「南海 166 号」（南海 149 号／北陸 190 号：宮崎県総合農業試験場育成）は「ヒノヒカリ」と比較して次のような特性を有する。

1. 出穂期で 1～2 日早く、成熟期で 2～4 日早い“中生の早”である（表 1）。
2. 稈長は短く、耐倒伏性は「ヒノヒカリ」より強い（表 1）。
3. 穂長は同等で、穂数は同等からやや多く、一穂粒数は多い（表 1）。
4. 玄米の千粒重はやや軽く、粒はやや小さいが、粒厚は同等からやや厚い（表 1, 2）。
5. 玄米重は標肥栽培で同等で、多肥栽培ではやや多収である（表 1）。
6. 玄米の外観品質は優れ、出穂後 20 日間の平均気温が高い年でも、基白粒は発生するがより高温障害の程度が大きい背白粒の発生率は低く、高温登熟性に優れる（表 1, 3）
7. 食味は「ヒノヒカリ」並の良食味である（表 4）。

## [成果の活用面・留意点]

1. 県央の「にこまる」生産地帯を対象とし、現地試験の参考資料として活用する。
2. 多肥栽培で多収となるが、食味や品質が低下する恐れがあるので、極端な多肥栽培はしない。
3. 穂肥の施肥時期が遅くなると粒数が確保できず減収する恐れがある（育成地）ので、出穂期の 20～25 日前に 1 回目の穂肥を施肥する。

[具体的データ]

表1 生育、収量、品質

試験区	品 種	出穂期 (月.日)	成熟期 (月.日)	稈長 (cm)	穂長 (cm)	穂 数 (本/株)	1穂粒数 (粒)	千粒重 (g)	玄米重 (kg/a)	品質	倒伏
標 肥	南海 166 号	8.21	9.26	70.9	19.1	15.3	91.0	22.6	53.9	4.0	0
	ヒノヒカリ	8.23	9.30	83.5	19.1	14.6	81.2	23.4	53.2	6.1	0
	にこまる	8.26	10.5	84.0	19.3	14.0	89.8	25.0	58.9	3.1	0
多 肥	南海 166 号	8.22	9.28	75.8	19.0	15.6	90.7	22.4	62.5	3.7	0
	ヒノヒカリ	8.23	9.30	89.3	19.2	15.9	79.7	22.9	58.6	6.2	0.4
	にこまる	8.26	10.4	87.6	19.2	14.4	88.9	24.7	64.8	2.9	0

注1)数値は標肥が2007～2010年の平均値、多肥は2009～2010年の平均値

2)移植：6月16日 3本/株手植え 栽植密度：30cm×15cm

3)標肥：基肥5-追肥2-穂肥3(Nkg/10a)、多肥：基肥7.5-追肥2-穂肥4.5(Nkg/10a)

追肥は移植後10日後、穂肥時幼穂長は南海166号2mm、ヒノヒカリ・にこまる：15mm

4)品質：1(上の上)～9(下の下)の9段階評価、倒伏：0(無)～5(甚)の6段階評価

表2 粒厚分布(重量比%)

品種	粒厚(mm)						
	<1.7	1.7-1.8	1.8-1.9	1.9-2.0	2.0-2.1	2.1-2.2	2.2<
南海 166 号	1.0	1.8	3.0	12.2	30.2	40.1	11.7
ヒノヒカリ	0.7	1.1	2.7	12.7	33.4	43.5	5.9
にこまる	0.5	0.7	1.2	5.6	17.9	44.2	29.9

注)2009～2010年の平均値

表3 出穂後20日間平均気温と基白粒および背白粒の発生率

年次	移植期 (月.日)	品 種	出穂期 (月.日)	出穂後20日間平均気温 (℃)	基白粒 (%)	背白粒 (%)
2009年	6.17	南海 166 号	8.24	26.2	0	0
	6.17	ヒノヒカリ	8.25	26.0	6.0	0.7
	6.17	にこまる	8.27	25.7	0	0
2010年	6.15	南海 166 号	8.21	29.1	41.3	13.3
	6.15	ヒノヒカリ	8.22	29.0	20.3	66.3
	6.15	にこまる	8.25	28.4	23.3	10.3

注)基白粒と背白粒の調査は100粒の3反復目視調査

表4 南海166号食味評価

品種・系統	2007年	2008年	2009年	2010年
南海 166 号	-0.063	-0.158	0.000	-0.050
にこまる	-	-	0.190	0.450*

注1)値は総合評価値、基準はヒノヒカリ、施肥は標準施肥

2)\*\*が1%、\*が5%の水準で基準品種と有意差があることを示す

[その他]

研究課題名：稲・麦・大豆奨励品種決定調査

予算区分：県単

研究期間：2007～2010年 研究担当者：古賀潤弥・田畑士希